

2023年 6月 8日

一般社団法人 日本建築学会
九州支部 建築歴史・意匠委員会
委員長 太 記 祐 一

八代市厚生会館についての見解

八代市厚生会館は、1962（昭和 37）年、熊本県八代市西松江城町 1-47 に建設された。1990 年に大規模改修工事、2009 年に耐震補強工事が行われる。その後、別館は八代市民俗伝統芸能伝承館・お祭りでんでん館建設予定地となり、2019 年に解体工事が行われる。その結果、本館のみが現存する。2019 年、八代市民俗伝統芸能伝承館の建設工事に伴い本館ホールは休館、2021 年にはホールの再開中止が八代市より通知され、2023 年、本館の閉館と解体が表明された。この間、熊本地震（2016 年）においても特段の被害はなかった。

2021 年、その価値が認められ、DOCOMOMO Japan より「日本におけるモダン・ムーブメントの建築」として選定を受けた。

1. 建設の経緯

1960 年代は戦後復興期を経て、各自治体が文化ホールなどを建設していく時代であった。1960 年代までに建設された各地のホール建築は 198 施設を数えるが、そのなかでも八代市厚生会館は初期の建設にあたり、熊本県内では初の公立文化ホールであった。

当時の坂田道男市長（1987-1973）は代議士から八代市長に転身し、長年、市長職を務めた。ドイツなどへの留学経験があり、「ウィーンのオペラ劇場にまさるともおとらないオーデトリウムを建設し、私が音楽を通じて感じとった芸術的感銘を八代市民とともに味わいたい」⁴⁾と、八代市厚生会館の建設に取り掛かる。「田園工業文化都市」を掲げていた当時の市にとって、港湾整備とともにその両輪となる重要政策であった。

坂田市長の子息、坂田道太（1916-2004）は 1959（昭和 34）年に厚生大臣を務めているが、建築家・芦原義信（1918-2003）とは高校時代の先輩にあたる。その縁があつて道太を通じ、1959 年に芦原に設計を依頼する。芦原はその年、中央公論ビルの設計で日本建築学会賞を受賞する。さらに音響設計は芦原を通じ、のちに建築音響の大家となる石井聖光（1924-）が担当した。八代市厚生会館は、芦原にとっても石井にとっても設計活動の初期の作品にあたる。

設計期間は 1959（昭和 34）年 5 月～1960（昭和 35）年 10 月、工事期間は 1961（昭和 36）年 4 月～1962（昭和 37）年 7 月である。

2. 建物の概要

敷地は八代市中心市街地の旧八代城北ノ丸、外堀、および武家地の西小路にわたる。東に道路を挟み天守台など石垣や内堀を残す本丸跡、北に道路を挟み細川三斎に由来する庭園が残る北ノ丸跡（松井神社）、国指定名勝の松浜軒がある。その他、武家住宅の澤井家住宅及び長屋門（1865（慶応元）年）、市立図書館、幼稚園、コミュニティセンター、八代市立博物館・未

来の森ミュージアム（伊東豊雄建築設計事務所設計、1991年）、前述の八代市民俗伝統芸能伝承館（平田晃久建築設計事務所設計、2021年）などが近接する。公共施設群が様々な公共サービスを提供するとともに、一帯の日本庭園やランドスケープ・デザイン、巨木が茂る景観が歴史的で緑豊かな地域を形成している。

建物は北向きで、大ホールや楽屋などからなる本館、会議室や和室、事務室、喫茶室などからなる別館（現存せず）をL字型に配置する。大ホールは964席（立ち見を含めて1200名収容）である。敷地の一面にある芝生の広場は外堀石垣が埋蔵されている国指定史跡である。構造は鉄骨鉄筋コンクリート造、延床面積1193坪（3944㎡）、設計は芦原義信建築設計研究所、構造設計は織本匠構造設計研究所、設備設計は建築設備設計研究所、音響設計は石井聖光氏、施工は鹿島建設株式会社九州支店である。

芦原は、いずれもDOCOMOMO Japanに選定されている駒沢オリンピック公園体育館・管制塔（1964（昭和39）年、日本建築学会特別賞受賞）、武蔵野美術大学アトリエ棟（1964（昭和39）年）、銀座ソニービル（1966（昭和41）年）などを設計し、『外部空間の構成』（1962年出版）、『外部空間の設計』（1975年出版）、『街並みの美学』（1979年出版、毎日出版文化賞、マルコ・ポーロ賞）などの名著を出版している。東京大学、武蔵野美術大学、法政大学の教授、日本建築学会、日本建築家協会の会長を務め、コマンドトール勲章（伊）、アメリカ建築家協会名誉会員（米）、文化功労者（日）などの称号を受けた国際的に著名な建築家である。

3. 歴史的価値

（1）設計者とその設計思想、設計手法としての評価

芦原はその設計思想、設計手法である「外部空間」論によって、特に高く評価された建築家であり、国際的に広く、また現代に至るまで影響を及ぼしている。「外部空間」とは建物の余白でも無限に広がる自然でもなく、建物内部の間取りと同様、目的をもって創られるものであり、自由に入出りできる「外部空間」は都市に広場を提供することができる。芦原氏は建物や動線などの関係性、寸法や素材などの具体的な指標も示し、「外部空間」の概念を設計手法にまで落とし込んだ。

これは1960（昭和35）年に留学したニューヨークにて東京大学への学位申請論文として執筆され、初めて理論化された。1962（昭和37）年には『外部空間の構成』（彰国社）として出版された。芦原は八代市厚生会館の設計を終えてから渡米しているが、芦原が提示した具体的な設計手法は八代市厚生会館に試みられているものであり、八代市厚生会館は「外部空間」論の出発点であり、実験場であったと言える。

八代市厚生会館で試みられ、のちに理論化されたものとして、例えば広場の広さ60m×100mは、建築の印象が残りまとまりのある広さとして、複数棟による入隅の形成やピロティは外部空間をポジティブにする手法として、「外部空間」と内部の各所の床高を少しずつ変化させ様々な高さの眺望を楽しむ設計は、内外空間を連続させるスプリットレベルの手法、上下階を連続した空間とすることができる階高1.5m以下、俯瞰景を増やす手法、へと理論化された。

建物全体で少しずつ床高を変化させ、様々な視覚的変化を作り出した計画は、別館が解体されたものの、本館のみでも十分に豊かに展開している。ピロティからは対面する石垣をフレーミングし、フィルムのように石垣風景を連続させ、スロープはピロティから2階テラスへ至る

プロムナードを形成し、テラスに至って広場や本丸を俯瞰する眺望を得ることができる。

(2) 地域における評価

前述の通り八代城址の一面を敷地とするが、建設当時は既に外堀が埋め立てられ住宅地と化していた。城内を幹線道路も貫通しており、城下町としての価値ある遺構が失われつつあったと言える。ここで芦原は以下の方法により八代市厚生会館を設計する。

- ①L字型に配置した本館と別館に加え、本丸石垣を広場の輪郭を形成する境界線として活用することで、広場の範囲を敷地外にまで展開する。存在感ある石垣の力を借りて広場を形成しつつ、石垣の価値を見直す主張にもなっている。
- ②玄関ポーチがあった本館と別館の間隙は、北ノ丸外堀があった場所に相当する。隙間は軟弱地盤を避けて建物を建設する必要に応えつつ、かつての外堀の存在を想起させていた。この隙間に石積み風の壁で仕切られた水盤を設けていたが、これは外堀と石垣を再現したものと読み取れる。この水盤に突出した凸部はホワイエ前の水盤にも繰り返されているが、本丸内堀に現存する突出部を意識したと考えられる。
- ③石垣や水盤、武者窓風のルーバー、勾配のあるつなぎ梁は、城郭建築をデザインモチーフとしている。これらは建物正面の台形の縁取りとともに、本丸石垣に対峙しうる重厚な存在感を示している。これら伝統的デザインが、スロープやピロティ、差し色などの近代的デザインと融合している。
- ④「田園工業文化都市」を掲げていた市にとって、港湾整備と八代市厚生会館の建設はその両輪をなす重要政策であった。1959（昭和34）年に八代港が重要港湾に、1963（昭和38）年に八代市が新産業都市に指定され、八代市厚生会館の北側前面道路は八代港へ続く幹線道路として拡幅される。八代市厚生会館はまさに新産業都市に生まれ変わる象徴として、市民に芸術的感銘を与える「文化の殿堂」としての二つの役割を担っていた。
- ⑤ホールは空間設計的、音響設計的にも音楽専用ではなく多目的ホールとして計画されている。特に細川三斎や松井家といった歴代の八代城主の影響により、能楽などの伝統芸能が豊かに伝承されている八代市に配慮し、舞台には花道がつき、所作台を備えている。
- ⑥同時にホールの収容人数約1000名が市の人口の1/100にあたることに着目し、市民のコミュニティの場としてホールを位置付けている。ホールは二階席を設けない単床式の一体型として設計しているが、これは音響効果に加え、コミュニティの一体感あるまとまりを生み出すためである。ホール内の1000人が、広場へと移動し「その辺になんとか群れて、ブラブラ城の下に行ってなんとなく話ができる」⁵⁾ストーリーを想定している。
- ⑦『史跡「八代城跡群古麓城跡麦島城跡八代城跡」・名勝「旧熊本藩八代城主浜御茶屋（松浜軒）庭園」保存活用計画』（2018年）において八代市厚生会館は城跡群の総合的なガイダンス機能を果たす施設として計画されている。また各城跡周囲にビューポイントを設置することが計画されているが、ピロティや2階テラスは絶好のビューポイントである。埋蔵されている遺構の平面表示も求めているが、八代市厚生会館と八代市民俗伝統芸能伝承館の間隙は、外堀の位置を立体的に表示するものである。

また『八代市景観計画』（2020年）では当該地域は景観重点候補地区に相当するが、江戸時代から現代建築にいたる歴史的景観の重層において、八代市厚生会館は特に重要な存在と言

える。

さらに『八代市歴史文化基本構想』（2019年）では歴史文化保存活用区域に相当するが、八代市厚生会館はその設計コンセプトも含め、歴史文化遺産を活用したまちづくりの重要な一端を担う。

（3）技術的観点からの評価

構造躯体は鉄骨鉄筋コンクリート造の薄肉柱を桁行方向に4mごとに配置し、両サイドの柱上部をつなぎ、門型を形成する。この時柱は上部ほど見込み寸法を大きくとることで、内側に倒れる側壁、台形に縁どられる正面をつくりだし、重厚な造形を生み出す。この各門型を最上部と中間部でつなぎ梁により接続する。特に最上部の勾配のあるつなぎ梁は構造的存在感を示しつつ、見る人に日本の伝統的建築を連想させる。この単純かつ合理的な構造的発想が、熊本地震（2016年）にも耐え得る強固な建物を作っている。また良質な骨材を使用したとも聞いているが、その結果、コンクリートの劣化を抑制していると考えられる。

この構造躯体と内部のホールは、入れ子に存在し二重殻をなす。当時他のホール建築で見られた折版構造では、音響効果が構造によって左右されていた。それに対し八代市厚生会館では、ホールの内部空間を音響効果を重視して計画することができた。聞くところによれば、様々な出演者が八代市厚生会館の音響を称賛したようで、それが市民の誇りの一因ともなっている。

その他、外部仕上げには杉小幅板型枠のコンクリート打ち放し（外部は塗膜改修済み）、壁面に紺色のセラミック二丁掛タイルの縦張り、那智石埋め込み仕上げの舗装が施されている。内部仕上げには、まず1階ホワイエを磁器タイルの床仕上げ、紺鼠と朱の市松模様を彩色した天井仕上げで落ち着いた雰囲気とする一方、2階ホワイエの床を色鮮やかなリノタイルで仕上げることで対比的な雰囲気を演出する。ホール内部は音響や視覚効果に配慮して、壁面をセラミックタイル仕上げ、天井はホール前後で異なる色彩計画とする。これら仕上げにも、当時のデザイン傾向とともに、芦原の設計手法に基づく表現を伺うことができる。

4. まとめ

八代市厚生会館は、第一に建築家・芦原義信の「外部空間」論の出発点としての価値がある。さらにその「外部空間」論自体が国際的に影響を与えた設計思想、設計手法であることから、日本のモダン・ムーブメント建築としても価値がある。

第二に当該地の歴史的文脈に考慮した設計や、建設当時の地域において果たした役割から、八代市の近代史にとっても意義ある建築である。

参考文献

- 1) 芦原義信：『外部空間の構成』、彰国社、1962.
- 2) 芦原義信：『外部空間の設計』、彰国社、1975.
- 3) 「新建築」誌、新建築社、1962年9月号.
- 4) 「建築文化」誌、彰国社、1962年9月号.
- 5) 「建築」誌、青銅社、1962年10月号.

- 6) 「市報やつしろ」, 1961.4.11, 1961.9.1, 1962.1.1, 1962.3.21, 1962.7.1, 1962.7.11, 1962.7.21.
- 7) 八代市経済文化交流部文化振興課：『史跡「八代城跡群古麓城跡麦島城跡八代城跡」・名勝「旧熊本藩八代城主浜御茶屋（松浜軒）庭園」保存活用計画』, 八代市, 2018.
- 8) 八代市建設部建設政策課：『八代市景観計画』, 八代市, 2020.
- 9) 八代市経済文化交流部文化振興課：『八代市歴史文化基本構想』, 八代市, 2019.
- 10) 森山学：「芦原義信の「外部空間」論に基づく八代市厚生会館の分析」, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 2017年8月.
- 11) 森山学：「芦原義信の「外部空間」論の八代市厚生会館以降の展開」, 日本建築学会九州支部研究報告, 2018年3月.
- 12) 森山学：「八代市厚生会館における場所の表現」, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 2022年7月.